



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸氏

末崎 孝幸氏

1945 年生まれ。1968 年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004 年に退職。Facebook 上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



左利きをなぜ『サウスポー』というのか

かつての米国での野球場は、午後の日差しがバッターの妨げにならないよう、本塁が北西側になるよう設計されることが多かった。このため左投手は南側(south)の手(paw)で投球することになり、そこから左投手がサウスポーと呼ばれるようになったという。サウスポーという言葉が最初に使ったのは 1890 年代、シカゴのスポーツ記者だといわれている。(また、アメリカ南部出身のピッチャーに左腕投手が多かったためサウスポーと呼ばれ始めたという説もある。)

その後、サウスポーは野球だけでなく、ボクシングでも使われ始め、テニス、卓球など他のスポーツにも定着していったのである。

バッテラ(の語源)

大阪寿司の代表、サバの押し寿司を「バッテラ」というが、これには次のようなエピソードがある。明治 20 年代、コノシロという魚をしめて小舟の形の箱にして売り出した寿司屋があった。小舟のことをポルトガル語で「bateira バッテイラ」ということから、この寿司のことを「バッテラ」と呼ぶようになった。

その後、コノシロがサバに代わり、形も小舟ではなく細長い角型になったのだが、「バッテラ」の名前は残ったのである。



へちま&糸瓜忌

へちまの本来の名前は、果実から繊維が得られることからついた糸瓜(いとうり)である。これが後に「い」が抜け「とうり」と訛った。頭文字となった『と』の字は「いろは歌(いろはにほへと・・・)」で「へ」と「ち」の間にあることから「へち間」の意で「へちま」と呼ばれるようになったのである。今でも「糸瓜」と書いて「へちま」と読む。

なお、9月19日は正岡子規の命日(享年34)で「糸瓜忌(へちまき)」である。辞世は三句あり、いずれもへちまを詠んでいる。その中の最も有名な一句が『糸瓜咲て 痰のつまりし 仏かな』。(へちまは8、9月に花を咲かせる)



衣食足りて礼節を知る

今から2千数百年前の中国は春秋時代といわれ、多くの国が覇権を争った時代だった。その中で最初の覇者となったのが、斉の桓公(かんこう)である。その桓公を覇者に導いたのが名宰相・管仲だ。

管仲は徹底した富国強兵策を行って国力を充実させたが、彼の著書とされる「管子」の中に有名な「衣食足りて礼節を知る」という言葉がある。この場合の礼節とは祭祀における儀礼のことだが、今では人は衣食などの生活に余裕ができて、初めて礼儀や節度をわきまえられるようになるという意で使われている。

近年著しい経済発展を遂げてきた中国は、近隣諸国との関係において礼儀や節度をわきまえているとはとても思えない。管仲や孔子が存在した時代とはまったく異質な国になってしまったようだ。

酒は百薬の長

前漢を篡奪した王莽は、皇帝となった後、財源を確保するために塩、酒、鉄を専売にした。その時の詔書に「塩は食肴の将、酒は百薬の長、鉄は田農の本」と記した。ここから酒飲みが、酒を飲むときに「酒は百薬の長」と唱えるようになったのであり、「百薬の長」は根拠のない言葉である。

その後、王莽は後漢の光武帝に滅ぼされて1代限りの皇帝となってしまったが、どこか胡散臭いところのある人物だ。平家物語の有名な冒頭にも悪役として記述されている。

いずれにせよ、飲酒はほどほどにしましょう。



直木賞(直木三十五)

小説を書いている人にとって芥川賞、直木賞は大きな目標だろう。この賞は(株)文藝春秋を創設した菊池寛が昭和10年、友人だった芥川龍之介、直木三十五を偲んで創設した賞だ(芥川は昭和2年、直木は昭和9年に没している)。ただ、芥川作品がいまだに多くの人に読まれているのに対して、直木作品はほとんど読まれることはなく、直木三十五は忘れ去られた作家ともいえる。

直木賞に名を残した直木三十五は、デビューしたときのペンネームは「直木三十一」だった。年齢が31だったからだ。本名は植村宗一。その植村の「植」の字を分解して「直木」という姓を、下の名前は年齢で名乗ることにしたのだ。年齢が上がると名前も変えた。32歳では「直木三十二」、33歳では「直樹三十三」。ただ、34歳のときは編集者との行き違いがあり「三十三」を2年間名乗った。そして35歳のときに「三十五」とした。ここで打ち留めとし、以降43歳で没するまで「三十五」のペンネームを使い続けたのである。代表作は、薩摩藩のお由羅騒動を描いた「南国太平記」。

